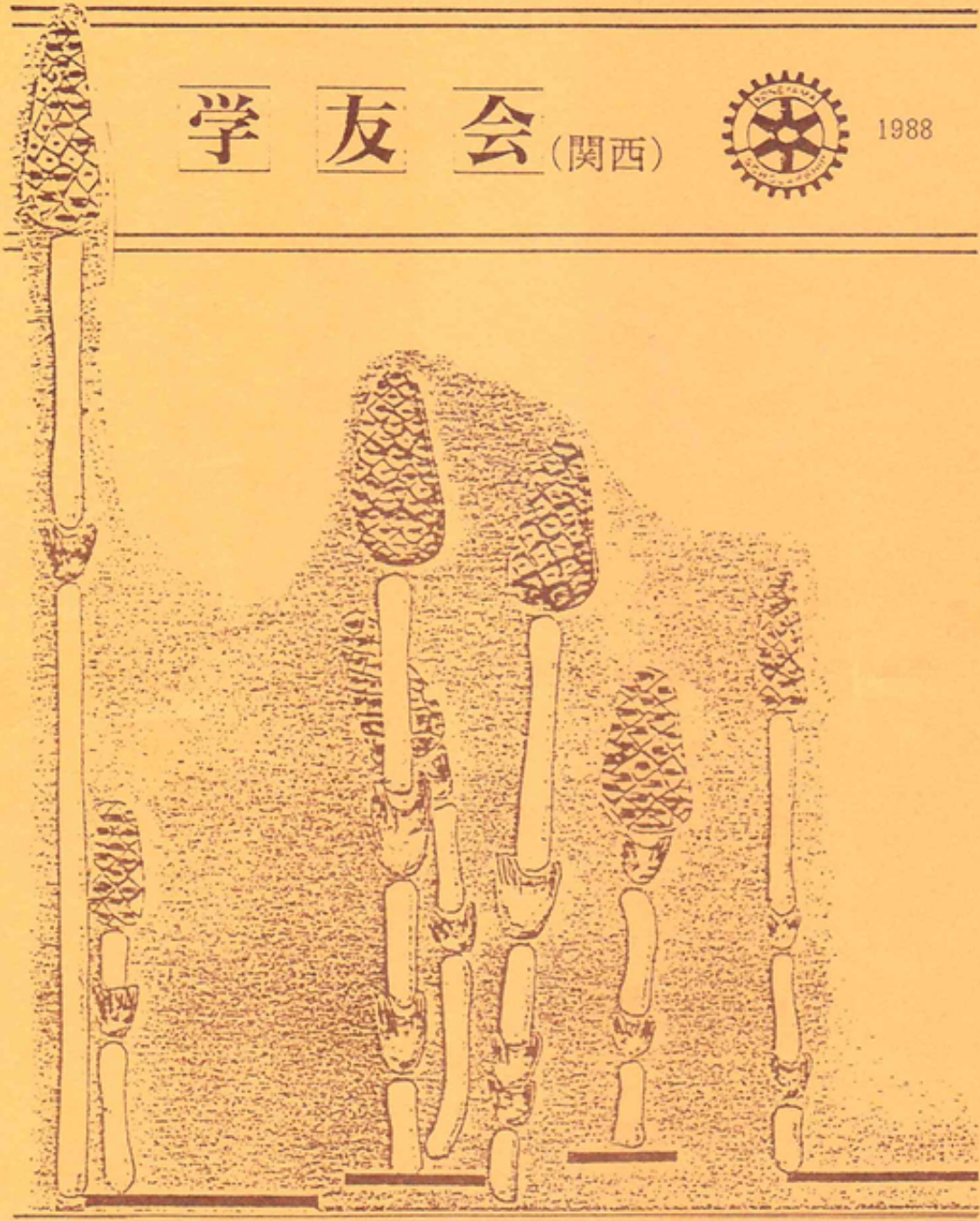


学友会 (関西)



1988



Y O N E Y A M A 2

目 次

巻 頭 言	重光世洋	(1)
会報第2号の発刊に寄せて	松本良淳	(2)
国際親善の実を挙げよう	伊瀬芳吉	(3)
共に力を合わせて国際社会の形成に	島津棟一	(5)
国際親善は理解から	中川藤一	(6)
留学雑感	香島明雄	(8)
学友会組織活動の問題点	林 錫璋	(10)
古い橋を壊さないで	戴 肇洋	(11)
私の留学生活	韓 美賢	(12)
私の理解するロータリーのバッジの意味について	丘 駿彦	(13)
研究余滴	許 紫芬	(14)
総会を迎えて	文 燕友	(16)
私が見たロータリアン	李 静淑	(19)
1987年度学友会活動概要	編集係	(20)
1987年度学友会活動状況写真	編集係	(21)

巻 頭 言

重光 世洋



米山奨学生学友会（関西）が初声をあげてから早や2周年を迎えました。この間、色々な活動をなんとかこなしてきました。これは偏にロータリー関係者や学友のみなさんの力強いご支援とご協力の賜物であることと感謝いたしております。会則にうたわれている設立趣旨にもとづいた活動は不安定ながらも、どうにかそれに合致しようと懸命にその一步をあゆみ出しつつあるように思います。

会員相互の親睦が国際理解と世界平和に繋がることは言うまでもない。まわりにはいやというほど国際化という言葉が飛び交い、馬耳東風の感を強くします。いま、われわれは世界で一番の金持ち国となった日本にありますが、ややもすれば物質文明に身も心も奪われしまっているのではなかろうか。心の文化や伝統はそれぞれの国の歴史により重みが異なるようではあるが、人類の歴史を基準とすれば皆同じではあるまいか。

人類が緑の存在するこの唯一の地球船に知恵をさづけられてから50万とも100万年ともいわれております。それにもかからわず、なぜいまだに安全かつ平和に宇宙を自由に運航できないだろうか。それにしてもいまだに難破しないのも不思議である。

異質性と同質性の混在する地球において、その違いをとことんまで解き明かすことと、いったアイデンティティを見いだすことがその第一歩の作業ではなかろうか。そのためには、この異質性と同質性に対する真の理解が必要だと考える。似たもの同士でもときとして誤解を生み、波乱含みになる。似ていてわかり合えると思っただけに、微妙な差異から生ずる行き違いが大事になることがあるのに、まして異質のものが一緒になると收拾がつく筈がない。そうであるならばある原則を制定して、その下で共に努力して生き、運営していくといったことにすれば問題は解決できよう。そのためには先ず、自ら積極的に交わる機会を作る努力から始めなければならないと思います。

本号は、とくにこれらの問題に対する提起や留学の心構え等について編集を試みたものである。その意を汲み取っていただければこの上のない喜びであります。

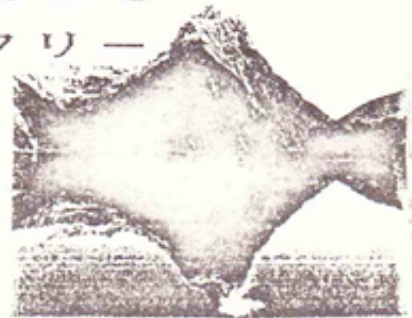
最後になりましたが、ご寄稿賜わりまし諸先生、会員の皆様に対し、心より厚く御礼申し上げます。

（会長 大阪産業大学工学部）

.....

会報第2号の発行に寄せて
... 平和に献身するロータリー

国際ロータリー第266地区
ガバナー 松本 良諄



米山学友会の皆さん、お元気で御活躍、ご勉勵のこととおよろこび申し上げます。
米山学友会が創立2周年を記念して、会報第2号を発行されますことを、心からお祝
いいたし、およろこび申し上げます。

会長を始め関係者の皆さんのご苦心を思うとき、この会報が学友会の皆さんの心を
一つに結び、お互いの励みになるよう衷心より念願するものであります。

留学生の皆さんはそれぞれの環境の下で、所期の目標に向かって勉勵しておられるこ
とと存じますが、円高のため生活上ご苦勞が多いことと思ひます。どうか高い理想と明
るい希望をもって、初志貫徹に向かって邁進して頂きたいと存じます。

さて、今年の国際ロータリーのテーマは「ロータリアン・・・奉仕に結束—平和に献身」
であります。ロータリアンは「超我の奉仕」（奉仕第一、自己第二）の点に結ばれて、
職業において、地域において、国際社会において自己を空（むな）しうして奉仕しよう。
とりわけ、世界平和は人類究極の目的であるから、すべて平和に役立つよう尽力しよう、
ということであります。

国際ロータリーのチャールズ・ケラー会長はアメリカの空軍将校として、太平洋上の
爆撃機の中で広島への原爆投下のニュースを聞き、兵士達が「これで戦争は終って平和
が来るぞ」と呼んだ、その声が頭から離れず、「私をして、生涯、平和に執着させるこ
とになった。自己破壊の手段さえもつ人類にとって世界平和は至上の命題であるから、
平和への献身は、疑惑を友愛に代え、苦難を奉仕で和らげる人間愛の最高の発露である」
と訴えています。

彼はまた「戦争だけでなく、人間に不安や恐怖を与えるものは病気、貧困、飢餓、あ
るいは人種問題、南北問題、宗教・民族の対立などすべて平和を阻むものである。」と
いって、これらに対してロータリーは力を尽くすべきであると力説しています。

.....
現在、世界のロータリアンは約104万人で、非政府機構としては世界最大の団体ですが、平和問題について直接行動に訴えることは色々な制約があって困難であります。従って、平和に通じる非政治的な問題について奉仕活動を行っています。

ロータリーの奉仕は個々のロータリアンないしクラブによって行なわれるので、一つ一つは軽微なものですが、それらが積み重ねられ、相互に作用することによって、巨大な平和問題にも貢献することができるのです。

その意味で米山奨学会の事業も、青年学徒に対する学資援助を通じて、相互に国際理解を深め親善を図ろうというもので、世界平和の道に繋がるのであります。

米山学友会の皆さんはロータリーと切っても切れない縁で結ばれたのですから、ロータリーの平和に貢献する心を汲み取って、将来とも世界平和に通じる道を歩んで頂くよう、心から切望するものであります。

終りに、米山学友会の益々の発展と会員皆様のご多幸をお祈り申し上げます。



米山学友会（関西）会報第2号に寄せて — 国際親善の実を挙げよう —

（財）米山記念奨学会
監事 伊瀬 芳吉



米山学友会（関西）も来る5月で2周年を迎えられ、会員各位のご活躍の程随時断片的に承り乍ら、常に国際親善をモットーに素晴らしい成果を挙げておられる事に深甚の敬意を表わしている一人であります。最近国際的に云々といった発表が多くなり、国際化時代に突入した感を強く印象づけられます。国際的と言えば具体的に何かと問われると若干人によって説明も違いませうが、次の表現をされた人の意見に私は全く同感と呼びたい気持です。即ち、国際的とは

.....

(1) 基本的に人種尊重の理念を強く持っていて、日常生活にも、これを実践すると
いった心構えのできていること、

(2) 相手の国の文化、伝統、習慣等を理解尊重し、相手国の立場に立って物を考える
事ができること。

以上2つの基本を忘れてはならないと協調されていましたが、全くその通りと思いま
す。

国際ロータリーは世界の平和に貢献するため常に考え、行動し相手の立場に立って問
題に対処するよう指導されています。米山学友会会員各位は縁あってロータリークラブ
又はロータリアンとの交流の場を経験され国際親善の具体化に共に頑張ってきた仲間
であると思います。

先日もロータリーのある会合で世界5ヶ国の留学生諸君から夫々日本へ来る前と日本
に来て実際に生活しての感じとかお気付を聞せてもらったが、矢張り想像と現実には大
きな違いがあるとの実感を持たれた方々が殆んどでした。雑談というか、ざっくばらん
の話し合いの中である人が結婚問題について尋ねたら、異口同音に結婚は当事者同士
の問題でお互いに理解し、愛し合い、将来にわたり人生コースを力強く共に歩んでい
けると判断して決める事で相手の国籍がどうであろうとも全然問題にならないとの話
でした。国際結婚是認の言葉が相次いで出ました。

また、日本に住んでいるトルコ イスタンブール大学出身の日本人妻はこう話して
くれました。日本人は外人に就いて感心が深いと言うか一般の日本人仲間と若干違
った取扱いをされる事が時々あるが大変心辛い、問題は個人個人で判断されるべき
で国籍により違った取扱いをうけるのはかえって日本人仲間に溶け込みにくいと
話されていました。

今や世界は一つで皆んな一緒になって相互理解を深めるよう努めるべき時であり
ませう。学友会メンバーの方々には母国と日本の事情、国情を身をもって経験され
た貴重な立場の人々ばかりなので是非この事実を基本に、両国の相互理解と両国
親善増強への橋渡しの大役を具体的に実践していただくよう強く要請したいと思
います。これら活動の積み重ねが International Understanding の現実
に結びつき、ロータリーの願いとする世界平和に一步一步近づける事が出来る
ものと思えます。お互いに更に力強く国際親善の実(じつ)を挙げるよう頑張り
たいものです。及ばず乍ら私もその一翼を担いたいものと
念願しています。今後共よろしく願います。

.....
共に力をあわせて国際社会の形成に

国際ロータリー第 265地区

米山奨学委員長 島津棟一

若葉青葉を渡る風もすがすがしく、学業に励むには最適の季節と思われれます。

京都ロータリークラブに所属し、第 265地区米山記念奨学会の委員長として活動致しておりますと、皆様の厚いご支援を日々実感させられます。誠に感謝の念に絶えません。この場をお借り致しまして、御礼申し上げます。

当奨学会は、留学生の資金のみならず、独特の世話クラブ・カウンセラー制度により個人的な接触を密にし、相互理解を深めたいと願っております。それより国際交流としての奨学制度を十分活用させることが目標です。故に、経済的困窮の理由のみで優先採用されるべきだと考えるのは間違いであります。本会の目的は、学問的・技術的指導者の養成に重点を置き、帰国後、民間大使として国際親善に尽くし、母国の平和的発展に貢献しうる人物を奨学することにあるからです。ですから、選ばれた方々は米山奨学生としての誇りをもって頂きたいと願っております。

現在、我国は「世界の中の日本」として重大な責務を背負って立たされています。また、貿易摩擦等々の諸問題も抱え、その行動の一つ一つが世界中の注目を浴びていることを自覚せねばなりません。その立場の複雑さはかつてない規模のものであります。こういった条件の中で、平和で友好的な見本として日本が行う国際奉仕活動は意義深いものであると言えるでしょう。

日本は島国ですので、他国にない文化を持ち、また他国にない伝統を持っています。その良さはここに記すまでもございませませんが、またそこから来る誤解も存在致します。この誤解こそ、あらゆる摩擦のもととして、最も解消すべきものであります。奨学生の方々は、自己の学問の追及にいそしむだけでなく、国家という大きな歯車を滑らかに動かす潤滑油の役目もしていただかねばなりません。我々は留学生の方々を通して、人類の平和に貢献し、国際奉仕を実践しているのです。奨学生の方々も、自分の責務を理解して、日本での日々を送っていただきたいと願っています。

.....
奨学生の方々も我々との触れ合いの中で、また日々の生活の中で感じた「日本」をぜひ教えていただきたいと思います。共に力をあわせて国際社会を形成させていくのが我々の願いであり、意見交換が世界平和のかけ橋となってくれることを強く希望してやみません。

今後も、皆様の御支援と御協力を賜わりながら、微力ではございますが、米山記念奨学会のため尽くしてまいりたいと思っております。末筆ながら、皆様の御健康と、尚一層の御隆盛をお祈り致します。

米山学友会創立2周年記念号に寄せて ” 国際親善は理解から ”

国際ロータリー第 266地区

米山奨学委員長 中川藤一

米山学友会満2年を迎えられ、心からお祝い申し上げます。重光会長様始め役員の方々の御努力の様子を見て居り、頭の下る気持で一杯です。お互いに異なった国、異なった生活様式の中で育った私達ですが、風俗習慣の違いを越えて、互いに交流し、親しく語り合う事が出来、文化交流の出来る機会を米山学友会（関西）を通じて持ち得た事をうれしく思っています。

日本国内の留学は円高の影響もあって、学校生活以外の分野で、大変御苦勞も多い事と察して居ます。私達は少しでも、皆さんの御力添えをしたいと思っています。

米山奨学生の方々の大半は日本の文明に関する事を勉強に来られた訳ですが、日本の文明の根本にあるものは、日本の文化であろうと思います。日本の文化が根底にあって、現在の文明を作り上げて来たと思います。日本の科学や経済による文明の勉強と同じ様に、日本の風俗、習慣、家庭内の躰（しつけ）等も理解し、熟知して戴きたいのです。

.....
学業を終了され母国にお帰りになられる方、また上級の勉学のため日本に残られる方、一度お国に帰られて夫々のお国の代表として日本に出張して来られる方、等色々の方々が米山学友会（関西）に居られる訳ですが、ロータリークラブの奉仕の心や、米山記念奨学会の国際相互親善や、国際奉仕の気持を汲み取って載いて、会員の皆様も夫々に奉仕の喜びを感じ取って貰って、実行して呉れば、こんなうれしい事はありません。

学生生活から社会に入り、いろんな経験を経て来た先輩の方々とお逢いする機会も恵まれる訳ですから、国際性豊かなアドバイスが得られる絶好の機会と思います。私も機会があって、韓国、台湾、中国、香港、シンガポール、マレーシア、フィリッピン、インドネシア、オーストラリア、ニュージーランド国等それぞれ数回程お伺いする事が出来ました。が、「百聞は一見に如かず」の詞の通り夫々の国を訪問し、夫々の国の方々の話を聞き、実際に見て、肌で感じてみると、従来思っていた事と大変な違いを夫々の国で感じました。夫々の国民の方々の考え方等は伺って見ないと判らない事です。

その意味では、私の様な訪問者ではなく数年間日本に滞在して居て呉れる皆様ですから、日本の国民の考え方や、生活風俗習慣も判って貰える機会が多いと思います。

私達の家庭へもどんどん入って来て載いて話し合いを致したいと思います。私の家庭も私の妻と息子三人があり、長男・次男は結婚して孫も夫々二人と三人が居り、近くに住んで居りますので、召集をかければ飛んで来ます。豊中市本町9丁目が住居ですから、阪大の方々はお近くです。今年は是非お立ち寄り戴く機会を作ってもらって、いろんな機会を通じて、何回も何回も逢いする事が理解を深める為に大事なことだと思えます。

今年は266地区米山委員会で企画致します、米山奨学家族の方々とおBの方々との交流会は10月30日（日曜）に万博会場迎賓館で実施する事に決定しています。御記憶下さい。

” 奉仕の時間を無駄に費やした、など考えてはいけない。

奉仕とは決して無駄にならないものだからである。”

” 未来というものは、だれにとっても1分間に60秒というきざみで近づいてくる。”

.....

留学雑感

香島明雄

この春、保証人を引き受けたある台湾人留学生に同行して、久方ぶりに京大を歩いた。二、三の新しいビルが目につき、自転車の激増による混雑が感じられたが、キャンパスの雰囲気は基本的に変わっていなかった。なかでも雑然とした院生研究室のたたずまいは、二昔前と少しも変わらず、来日当初を想起させて懐かしかった。ただ留学生の保証人をやる年配に達してしまった事に思いが及ぶと、やはり一抹の寂しさを禁じ得なかったが。

私が文部省留学生として来日したのは1964年4月であったが、当時の気持は、二年間の奨学金支給期間を大過なく過ごし、オリンピックを観て帰国できればということなし、といった所であった。それを今日まで滞在してしまった訳が、長居の理由は自分でも判げんとせず、幾多の偶然の積み重ねとしかいいようがない。その間に結婚や就職などを体験してきたが、ここでは留学生時代の思い出を若干記して見たい。

私の日本体験は羽田に始まるが、出迎えの文部省の係員の態度の故に、第一印象は正直のところ芳しくなかった。というのは、私達とは「同期の桜」である留学生を迎えに来た女性が一寸美人だった為か、係員は彼女らの世話を没頭していて、残るわれわれを等閑に付してしまっただからである。やがて駒場の留学生会館で、私は受入先が決まるまで二週間程過ごすことになるが、その間、目のあたりりにした食堂での一光景は今もって忘れられない。その時、東南アジア系の留学生が大勢、ボクシングのテレビ中継を観ているのだが、中米の選手と対戦する日本選手を応援する者は絶無に近かった。これを以て日本の留学生対策の失敗を考えるのは早計であろうが、私には些かにショックであった事を覚えている。

やがて私は京都に列車で到着するが、連絡済みの京大の係員は駅に姿を見せず、途方に暮れて京大に電話すると、土曜日の午後にたまたま居残っていた全く係の違う職員の方が、留学生系の自宅まで車で同行してくれ、留守だったことが分ると今度は学生寮での宿泊を手配してくれた上、夕食まで御馳走になった。その親切さに私は地獄に仏の譬えを思い出し、無責任な係員への恨みつらも雲散霧消したものであった。

京大大学院での二年目あたりであろうか、ある日事務室に立ち寄ると、事務職員の一人が台湾から航空書簡を私の前に付き出してきた。話によると、内容は京大への留学手続についての質問だが、該当する予算がないので返事を出せない、「出来れば張君何とかしてくれ」というのである。私は一瞬わが耳を疑ったが、黙って引き受けた。結局、台北の范君は来日しなかったが、当時の私は、この場合ならどうするかをよく知っていたアメリカの大学と引き較べてやりきれない思いに包まれたものだが、ずっと後になって、留学生係が京大にある以上、学部でなくそこに手紙が届いていれば、返事は出されていたのではないか、と「京大の名誉」の為に考え直したものである。

その後、大阪万博をはさんで、米山奨学会のお世話になった。その間いろいろと思い出話はあるが、奨学会の幹部の方からお手紙を頂戴したことが印象に残っている。当時毎月の奨学金を受け取る際には、短い感想文を提出するきまりであったが、その中で私が、文部省奨学金の受領の際、台湾の留学生だけが、サインでなく捺印を求められる点について所感を述べた事があったが、お手紙は、そう言った事実をそれまで知らなかったこと、サインだけでもよいと思うこと、の2点が記されていたように記憶している。ハンコの件については、いずれ機会を見て、その後の変化の有無を国費の人に訊ねて見たいと思っている。

何か不平不満だけを並べた結果になったが、一つには紙数不足で、「頌徳」の面に筆が及ばなかったことにもよる。十万人の大目標が示されているように、日本の留学生事情は大きく変化しつつあるようだが、留学生OBとして、後輩諸君が、よりよい環境のもとで、勉学の日々を送られるよう願ってペンをおきたい。

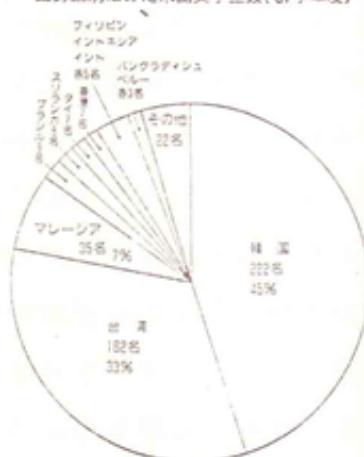
(京都産業大学法学部)

1988学年度 地区別奨学生数

1988年4月1日現在			
地区	奨学生数	地区	奨学生数
250	0	252	10
251	9	253	5
252	13	255	35
253	6	254	21
254	6	256	34
255	29	258	14
256	14	257	4
257	21	259	9
258	50	271	12
275	36	270	22
259	32	274	10
279	23	272	8
260	8	273	5
276	22		
261	7	計	465

*最終の奨学生数はCY、DisYとSY-I SY-OBが加算されて、500名の予定

出身国別にみた米山奨学生数(87学年度)



学友会組織活動の問題点

林 錫璋



米山奨学生学友会（関西）が発足してから、もはや2年になりました。この間いろいろと活動をして参りましたが、会員の出席率が悪い事と資金不足が大きなネックとなっている。この問題について少し掘り下げて考えてみたいと思います。

1. 出席率が悪い問題について

現奨学生や一般留学生等との交流において、学友会メンバーの出席率が悪いと指摘されたことがあります。私達もこのことについて常に気にしています。これは、財団法人ロータリー米山記念奨学会の発行される奨学生名簿から見れば、関西に在住する元奨学生の数は少なくない。しかし、住所不明などの理由で、我々はこの人達と連絡がとれないことと、連絡がとれても奨学金が切れて引き続き大学院に在籍して頑張っている人達が大半を占め、本会へ入会する余裕がないのが現状であります。正式に本会に属しているメンバーの数も出席できる数も限られ、従って、本会は常時出席できるための常備軍として、会長を含め役員を13人にも及ぶ人数を設定したのもその苦肉の策の一つであり、これが学友会の基本メンバーとも言えよう。

2. 経費不足の問題について

学友会の自主性から、同会の運営等の経費は会費で賄うべきであることは言うまでもありません。しかし、先に述べたように、正職のある者が少なく、パーティーの一つ開こうとしても、現奨学生や一般留学生を招待する程の力がなく、時々ロータリー米山記念奨学会や国際ロータリー各地区のご援助を受けざるをえないのが唯一の心苦しい所であります。思うに、在阪する正職のある元奨学生の層が厚ければ、と期待しておりますが、留学期間が終われば、本国へ帰るのが建前だ、日本に在留するのはおかしい、という考え方が日本全土圧倒的に多い。卒業後日本に留める機会が自ら制約される。日本の環境が卒業された留学生の留める場となれない以上、第三国へ移転される場合が多い。2年前在外研究員としてアメリカへ行った時、多くの元奨学生の人達に出会った。日本に残して仕事をしたかったそうだが、日本の環境がそれを許さず、やむなく渡米された事情があった。しかし、現在はアメリカで立派な法律事務所や会計事務所等を開いている人もあり、貿易会社を経営して大成功している人もあります。元奨学生でなくても日

.....
本からアメリカへ転向された方も沢山逢いました。この人達は、結局日本が育ててやっ
って、アメリカのために働いていることとなります。これは日本にとって一大損失とも
言えます。これから国際化社会へ邁進しようとする以上、留学後の行き先は本人の学ん
だ学問の最も有効に発揮できる場に留められる環境を与えてやっても良いではないかと
思います。そう言う時が来れば、私達の層も厚くなるのでないか、と細々と期待して
いる次第であります。 (副会長 桃山学院大学)

” 古い橋を壊さないで！”

戴 肇 洋



ロータリーが国際的な平和、友愛、及び奉仕を旨とする非政治的な組織であることは常識として誰にも知られていると思うが、しかし、最近、「米山記念奨学金を中国からの私費留学生も選考対象となされて認めるよう」という声が多く聞かれる。それは玉に瑕を感じさせられて、どうしても納得できなく、また「これでよいのだろうか」と考えさせられる点もあり、敢えて、会報をかりて「世界中に友愛の橋をかけよう」と志すロータリアンの皆さんの良識にも訴えたい。

周知の如く、中国大陸は共産制度で経済自由及び株式企業を許していないため、今日においてロータリーの発足の見込みが全然ないことは事実だが、また国際ロータリーへの貢献も尽していない。もし、中国からの留学生に米山奨学金を授与するなら、他のロータリー組織のない国（地域）からの留学生にとって、不公平にはならないか。また、現在の奨学生数をこれ以上増やさないとすれば、今まで米山奨学生になっている数の多い韓国、中華民国（台湾）の留学生を相対的に減らさなければならなくなる。そうすると、日本との正式な国交がなくなった関係で、国費留学生としての道を閉ざされている台湾の留学生たちにとって、一層不公平にはならないか。台湾は150以上の国と地域の間文化や経済など多面の交流を進めて国際社会に活躍している。とくに、台湾地域のロータリーが国際ロータリーの一員として、諸活動に活発に参加して、日本のロータリーと親しく交流を深めつづけているのは周知のことである。

ロータリー精神を守って、国際友好に精一杯やって来た努力は泡になると思わないか。中国大陸の人民に友誼の手を伸ばして友情の橋を架けることは大賛成ではあるが、しかし、新しい橋を架げるためには他の方策があると思うが、ロータリーの精神を守って、古い橋をこわさないように私はお願いしたい。 (現奨学生 関西大学大学院)

私の留学生活

・・・ ささやかな友情が大きな人類愛に ・・・

韓 美賢

私の留学生活は約4年前に熊本で始まりました。緑が豊かで、ゆったりした雰囲気を持つ熊本は外国生活での緊張を和らげる静かな町でした。

熊本大学の社会学科では私が最初の留学生であることもあって、先生や学生たちが本当に優しく、いろいろ気をつけてくれました。まわりからの暖かい配慮があったにもかかわらず、初めの頃は不安ばかりで落ち着かない時期が続きました。日本語を自由に話せないことや日本の習慣にとまどって遠慮がちになった行動などから少しストレス気味になったこともありました。

でも、まもなく、生活でのコツがわかりました。それは会話で話す時に一つの言葉で自分の意志を表わす方法でした。伝えたい内容を知っている単語で何回も繰り返し繰り返し言うと相手が正しい文章(特に動詞の変化)を作ってくれることでした。この場面から覚えた日本語はなかなか印象的で忘れられなかったのです。

しかし、このようなやりかたには必ず話し相手が必要であります。私の日本語の練習のため同級生、近所のおばあさん、スーパーのおねえさんなどが相手になってくれました。私が日常生活で不便を感じなくなったことはこのようなまわりの人々のおかげだと思います。

今年、米山奨学生になりました。ロータリーで言う「他への思いやりや助け合い」の精神は私が留学生生活の中で感じたこととなにかつながるものがあるような気がします。私が体験した他人からの情や助けなどがロータリアンたちがなさっている国を越えた人間愛と一致するからです。

.....
ささやかな友情が大きな人類愛につながるように私も自分の体験を大切に、今後暖かい人間関係ができるように頑張りたいと思います。

(現奨学生 大阪市立大学大学)

私の理解するロータリーのバッジの意味について



丘 駿彦

周知のとおり、国際ロータリーは、それを象徴するバッジをもっている。それは「輪」のようなかっこうをしている。私は小学生時代にロータリークラブが主催する演説会や作文コンクールなどの活動に出たことがあったために、小さい頃から国際ロータリーという組織を知っていた。当然、その輪のようなかっこうをしたバッジにも、私にとってなじみのあるものであった。

中華民国（台湾）においては、国際ロータリーという組織は「国際扶輪社（会）」という名を付けられて、国際ロータリーという名前よりも知られている。いわゆる「扶輪」の意味は、輪を持ちこたえて倒さないように、走らせると言うことである。もちろんこの輪は単に「車の輪」というものではない。この輪は歴史の輪という意味である。このような歴史の輪の役割は、いったいどういうものを運んで前進させることであろうか。このわれわれが今いきている時代は、途絶えることのない歴史の進歩の一時点であるといえるが、それも時の流れという輪が回転している結果なのであろう。したがって、このときの輪を回転させ、時代を進歩させることが、国際ロータリー組織の任務だと思われる。これが一つ目の任務である。

いろいろな交通機関でも輪を利用している。車や電車にはもちろん、飛行機や船にも輪が不可欠である。交通機関は地域と地域との間で、ものと人を運ぶのに欠くことのできぬものである。国際ロータリーは国際的な組織であり、各国でそのメンバーを育てている。各メンバーは、その地域で国際間の経済・文化などの交流を促す輪となっているのである。したがって、国際ロータリーは、そのメンバーの活動を通じて、世界平和を促進する任務をもつとなっているのである。これがもう一つの国際ロータリーの任務である。

.....
小さい頃の私は、国際ロータリーがなぜこの輪のかっこうをしたものをそのバッジにしているのかを理解することができなかった。今になって私は、ようやく国際ロータリーの設立の目的がこのバッジに示されていることを推測することができるようになった。ただ、このような理解が正しいか否か、自信はないのである。しかし、この輪の真の意味は私の推測したとおりであろうと思います。

幸いにも、今年に私はロータリー米山奨学生として選ばれた。さしあたり、私は米山記念奨学会を通じて日本について色々なことをもっと認識できるよう努力していきたい。また、将来国へ帰ってから、自分の力のかぎりに時代の輪を動かすように試みていきたいと思っている。

(現奨学生 神戸大学大学院)

「 研究余滴 」

許 紫 芬



私達は一日また一日と毎日を生きていくわけであるが、その中で、いつもの親友や職場の仲間の外に、人によって程度の差こそあれ、新しい人と知り合う。とくに、自分の熟知している所を離れて、外の土地を訪れたり、働く時に人との出会いがある。研究の必要上、私は長崎に二か月という短い期間ではあるが滞在したことがある。この2か月の間に、沢山の人々に世話をして頂き、また色々招待をしていただいた。それまで面識のなかった人々より受けた好意や手助けは、私にとって有難かったし、感激した。

「持てる人」が私に助けの手を差し伸べてくださった時、私とその人は共に飲みかつ食べて、大いに楽しんだ。富貴は喜びと満足をもたらし、成功とはなんぞやということを模範として示すが、私はまた「持たざる人」の好意をも受けたことがある。そしてこのことによって私の人生観は大いに揺さぶられ、それ以前のものとは違うものになった。

最初長崎に来て、私は旅館に一週間居たが、後に友人の紹介で長崎のカトリックの聖フランシスコ会の人々と知り合った。私はそこの人々に短期滞在の宿を手配してくれる

.....
ように頼んだところ、二人の御婦人方が協議した結果、私を山口さんというある七十才の独り暮らしの老婦人の処へ連れて行くということになった。そこで私は二か月間ほどお世話になったのである。

山口さんと共に暮らした二か月の間に、私は命と生きて行く上での基本原理を多く発見した。この山口さんは、心のたいへん美しい、神に対して敬虔な信仰をもっておられる方であった。この人は家の中をいつも大変きれいにしていて、自分の植えた花を部屋に欠かしたことがない。また、この人は農業の出で、農業をなりわいにしてきた。そして、己が高齢に達したにもかかわらず、今でも庭に野菜を栽培していて、自分の食用にする分を賄っている。御主人は第2次世界大戦で被爆して、それがもとで亡くなられた。子供達は、すでに成人して別居しており、事情があって、山口さんは生活保護を受けている。やっと生活できる程度の援助をもらって簡素な毎日を送っておられる。この婦人のこれまでの人生の話を聴いていると、この世のあらゆる不幸がこの人の上に起こったように思える。長崎の歴史はそのままこの人の歴史でもある。その身に在った不幸は、その顔に深々とした皺を刻み込んだが、この人の他人に対する思いやり、中でも異郷の人へのそれは、恰もダイヤモンドの如く、日々光芒発し、私の魂を照らし、私の精神を暖め、異郷に居る私の孤独を慰めてくれた。そして私は全てを隠すことなく彼女に打ち明けるまでになった。そして、彼女の簡素な生活から私は生活上の根本的なことは何かということ学んだ。

彼女は一生の間働き続けて息むことがなかったが、却てそのお陰で老年になっても身体は健やかである。その神への敬虔な態度と周囲の人間に対する優しさは顔の皺を掩うてなお余り有り、その身体の上は光に包まれているように見える。それは接する人としてその内面の精神を直ちに感得せしめて、而してその年齢を、また外見についてなど、忘れさせてしまう。

私は、昔の王サムエルの言葉、箴言に記載された諺を思い出す

「麗しさは偽りであることがあり、

美しさもむなしいものとなることがある。

しかし、エホバを恐れる女は自分に賞賛を得る」

山口夫人とのことは、私は永遠に忘れないだろう、それはまた、私にこれから先、生きていく上で大いなる勇気を与えてくれた。私は、人生の道路の上を、更に軽快に、また堅実に歩いていこう。
(元奨学生 大阪大学大学院)

.....

「 総会を迎えて 」

文 燕友

最近、日本国内では円高によって苦しんでいる留学生のことがしばしば話題になる。そして、物価高に苦しむ留学生たちを救済するために奨学金制度の拡大、会社社員寮の提供といった、いろいろな対策がかなり具体的なレベルで論じられている。元留学生としては、非常にありがたく思う次第である。このように一方で日本人側の外国人留学生に対する理解、経済的援助などその感心が高まりつつあるが、近年のような円高状況で日本に留学しているわれわれとしては、与える側（日本）に「国際交流、国際協調」という名のもとに何かと要求ばかりをしがちである。この辺で、われわれ留学生も自分たちの姿勢をいま一度振り返って見るのも良いのではないかと思う。

去年(1987)の秋に某ロータリークラブで関西地方の留学生の一部を対象にアンケートを実施した。その中には「あなたが現在困っている問題があれば○印をしてください」という項目があって、アンケートに答えている人数の合わせて8割りが「経済問題、住居」をあげている。この結果からも円高というのが留学生たちの生活にどれだけ打撃を与えているのかを察することができる。次に多いのは「博士学位の取得問題」であった。前者と後者は次元の異なる問題ではあるが、ここで留学生として再認識すべき点は、日本留学の際に、日本国内での住居を含む生活環境、または学位取得可能与否などについて十分な検討と納得の上に日本留学を決定すべきだったということである。(もちろん、留学の途中で当初とは事情が変わるなど物理的にどうすることもできない点などがあるが。)極端に言えば、日本人の中には、留学生たちに「事前に十分な検討をして納得した上で日本へ留学を決めず、来日した後日本の国内事情について自分たちが予期したのと異なるからといって文句を言っても仕方がない」といった意見をもつ人もいるであろう。

数日前に受け取った「よねやまだよりVIII」には、ある留学生の「留学生を甘やかさない方がよい」という文章が載っていた。その趣旨は「日本の先生の中には、一部の留学生に対して不満があっても、彼らは留学生(外人)だから遠慮しておくという考えをもっている人が少なくない。～留学生に対して過保護的な部分がある～いけない部分をほっておかれるよりも厳しい指摘を望む」といったようなものがあつた。同じような感

.....
想を持つ留学生は他にもいよう。日本人の先生たちの留学生に対する態度云々も半分以上は本人次第ではないかという平凡な私見を付け加えながら、某大学で長年留学生指導をしておられる日本人先生のコメントを紹介する。その先生は、「日本の大学院」への入学を希望する留学生たちは（特にこれから来日しようとする学生たちは）日本での研究する分野について来日する前に本国で十分な基礎勉強をしてから来て欲しい、現状は留学生の中の相当の数が下準備を十分にしないまま来日するため、本人はもちろんのこと指導する側もとまどうことがしばしばである」と、おっしゃるのであった。

そこで、これから日本留学を考えている本国の後輩たちに、日本留学の際にもっとも重要なのはなにか、それぞれの専門分野において、なにを用意すべきかなどと生きた情報を提供することが、われわれ留学先輩たちの役割のように思えてくるのである。日本のどこにどういう大学、大学院があって、生活はどうすればよいかなども大事ではあるが、そのような情報は一般の本屋で売っている案内書を見たら充分足りることであろう。

上に紹介した日本人先生のコメントは単に専門分野における下準備だけを意味するのではないと思う。日本留学の必須条件である日本語の用意についても同じことが言えると思う。

ついでに、「国際化、国際的」という言葉が盛んに用いられるご時世でもあるので、外国と日本とをつなぐ言語、中でも日本に来ている留学生と日本語について感想を述べておきたい。

最近、日本の内外では、日本を理解し、日本をもっと知ってもらうためにいろいろな催しやさまざまな角度から議論などが行なわれている。その中でも、ロータリクラブと留学生たちとの関係という点から、みなさんにちょっと紹介したいことがある。去年12月5日に、阪神分区 I. G. F. が宝塚ホテルで開かれた。そこでは、「国際奉仕」というテーマを取り上げ、それをさらに1部、2部に分けて、1部では在日外国人および留学生の立場から直面している諸問題を話題提供してもらい、ロータリアンにその実態を理解してもらおうと同時に国際奉仕の問題点を提起し、2部では、1部の問題提起を受けて、ロータリアンとしていかに日常生活の中で国際奉仕を実践すべきかを討議する、といった内容であった。実は、私もその時のパネラの一人として参加させていただいたが、そのようなテーマを設定したのは、できるだけ多くの留学生たちに、日本での留学期間中に学問以外の面においても日本を沢山知ってもらいたいという願いからであったようである。よく言われる表現を借りれば、日本が好きになって帰って欲しいのに、む

.....
しろ日本が嫌になって帰る人が多いということについて、その原因はどこにあるのかその原因を知りたい、そしてロータリアンとしてできることは何があるかなどを話し合う、そういう場を持つといったところに意味があったようである。日本をよく知るにはいろいろな手段があると思われるが、私は日本を理解し、日本をよく知るための最も根本的な手段は「言葉すなわち日本語」だと思う。

現在日本には、1万8千人留学生がいるが、そのうち、3千人が国費留学生、あとの1万5千人は私費留学生であるという。日本への留学には、アメリカのTOFELのようなものがないために、来日した時点での日本語能力は人によって相当な差が見られる。(もちろん国費留学生の場合は、選定の時に日本語のテストを受けるので、ある程度には達していると思われるが)、中には本国である程度日本語を勉強して来日する者もいれば、ほとんど日本語ができないまま来日する者もいるのが実情である。

さて、私費留学生が日本の大学院へ入る場合には、大学や個人によって多少の差はあるが、大邸の場合、半年ないし一年間を研究生として在籍しなければならないのはみなさんの知っている通りである。通常の研究生でいる間のことよりももっぱら日本語の勉強に多くの時間を費やしなければならないのが現状である。しかし、私はそれでいいと思う。むしろ、「日本語」を専門とする者は別として、ほかの分野を専門にする者も、正式に大学院に入る前に、もっと徹底的に日本語を勉強してしっかり身につけておくべきだと思う。それはどうしてかといえば、将来の研究者を目指している者にとって「日本語」は単なる「意志疎通の手段」またはその程度のものであってはならないからである。みなさんも知っている通り、日本語はほかの言語に比べて「話し言葉」と「書き言葉」との落差は大変大きい。これから「日本語」で科学をやろうとする人間にとって特に「書き言葉」の習得、訓練は非常に大事である。そして、ただうわべだけを勉強して本国に帰るのではなく国に帰った後も自分で物を創造できるような人間になる上でも言葉の持つ意味は大きい。日本をよく知る、よく理解するなどはその次の問題だと思う。いや、日本語をよく知るといことは日本をよく知る、理解することに深く関係すると思う。

(副会長 帝塚山短期大学)



.....

私が見たロータリアン

李 静淑

私が日本のあるロータリークラブと親しくなつたのは去年4月から奈良ロータリークラブの米山奨学生としてお世話になって以来です。それ以前は正直に言ってロータリークラブがどんな活動をなさっているかよく知りませんでした。毎週1回開かれる例会の時もロータリアンたちが集まってどんなことを、そして何の話しをなさっているかよく知りませんでした。去年4月、始めて例会に出席しました。始めはちょっと不安でしたが、そんなに堅苦しい雰囲気ではないことにまず安心しました。いろんな職業をお持ちになっている方々がその日だけはみんな1つのロータリアンとして固まっている感じでした。だからお医者さんも社長さんも先生の方もみんなその場では1つのロータリアンにしか見えませんでした。

ちょうど6時になりますと、ロータリアン全員はみんなお立ちになって、まず柔軟体操からその週の例会が始まります。何よりびっくりしたのは年齢に関係なく、会員の方々みんなが役員という言葉に従うことでした。1時間の例会のプログラムの中にはいろんなことがありましたけれど、その中で特にニコニコ報告と理事会報告はあらゆる会員さんのことやいろんな情報を聞くことができる時間でした。また、印象的な時間は卓話の時間でした。その時間はいろいろな方面の方を招いて、その方にいろいろな話しを聞かせてもらう時間で、楽しかったし、役に立つ話しも多かったのです。

1時間では十分な話しができない週1回の例会でしたけれど、家族的な雰囲気で行なわれる例会を通じて私はロータリークラブのいろいろなことを知ることができ、本当によい経験でした。それぞれが忙しい仕事をもっているにもかかわらず毎週の例会にご出席なさるロータリアンの精神には驚きました。このお蔭で、日本のロータリークラブがどんな活動をなさっているのかを少しでも知ることができ、今でも感謝の気持ちで一杯です。1年間ロータリークラブでお世話になった私は、単なる米山奨学生ではなく、ロータリアンの精神を生かして今後日韓親善のための架け橋になって頑張っていきたいと思えます。

奈良ロータリークラブ皆様にもう一度感謝のお礼を申し上げます。本当に有難うございました。

(元奨学生 大阪市大大学院研究生)

.....

1987年度活動状況

- ◇1987年度 学友会総会 於大阪重慶飯店
参加者70数名 (1987.5.31)
- ◇D-266 ローターアクト交流会に参加
(1987.9.)
- ◇米山月間において各クラブより卓話依頼
数名のOBが担当 (1987.10.)
- ◇1987年度学友会懇親会 於大阪桜ノ宮
府職員会館 参加者60数名 (1987.11.14)
- ◇国際ロータリー第 266地区主催米山奨学
生レクレーションに参加 (神戸ワイン城、
白鹿酒造見学) (1987.11.23)
- ◇D-266 I.G.F.にバネリストとして参加
(文副会長 1987.12.)
- ◇各地区米山奨学生終了者歓送会に参加
(1988.2.)
- ◇各地区(D-245,D-266) 新規米山奨学生オ
リエンテーションに参加 (1988.5.)
- ◇その他諸活動に参加

◎ 感謝 ◎

学友会の育成並びに諸活動の補助のために、
(財)米山記念奨学会、国際ロータリー第
264,265,266,268 地区米山奨学委員会より
多額の支援金を戴きました。この紙面を借
りて衷心より感謝の意を表わします。

1987年度活動狀況写真



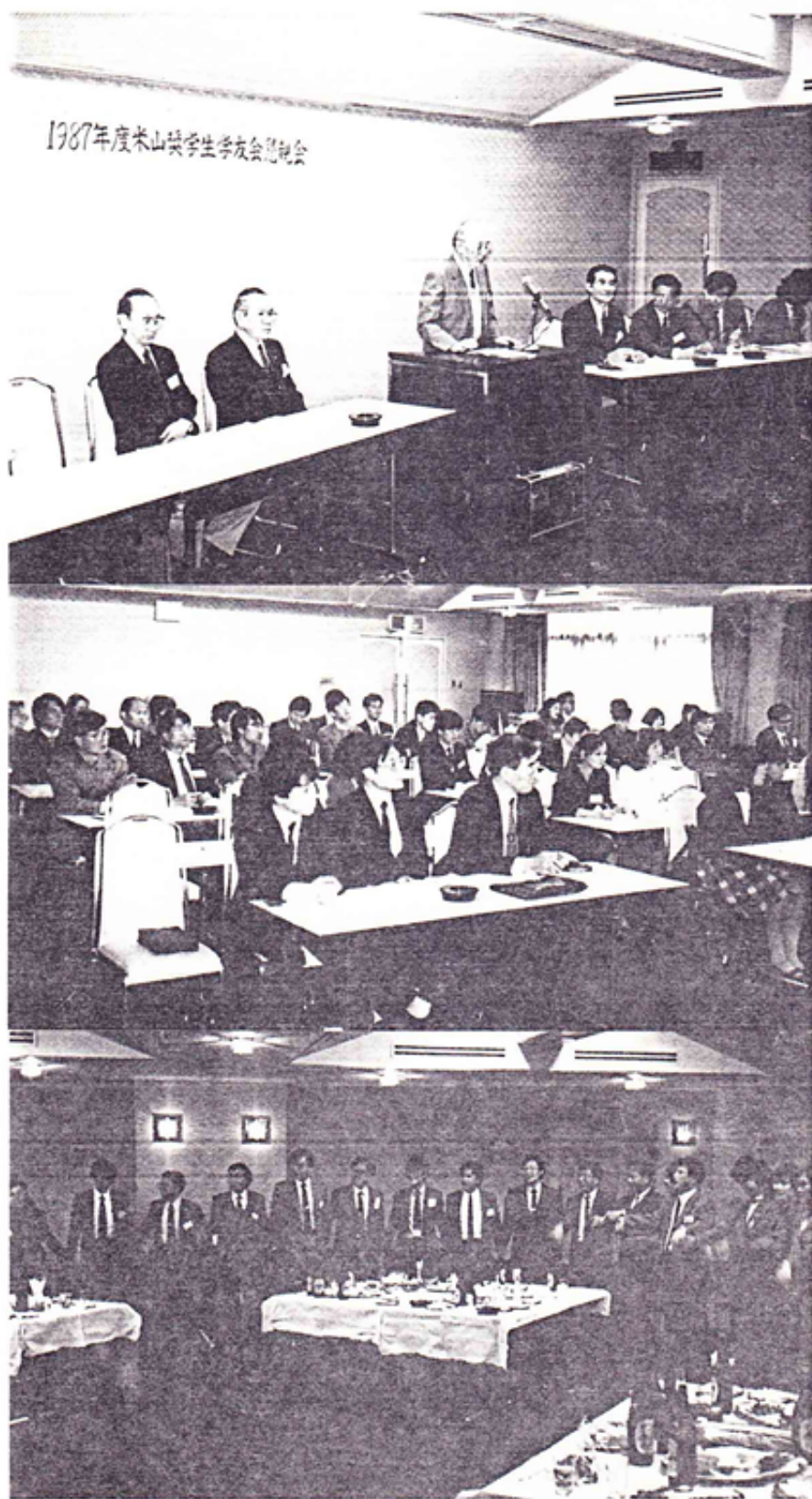
一九八七年度関西地区
米山奨学生学友会総会



一九八七年度関西地区
米山奨学生学友会総会



1987年度活動狀況写真



— 編 集 後 記 —

◇学友会（関西）創立2周年に際し、われわれの抱えている問題点や今後の活動の在り方などについて編集を試みました。

◇米山記念奨学生の心構えと奨学金の目的についてなんらかの認識と理解が得られれば幸いと思います。

◇国際化における同質と異質との違い、そこにある一致性を見い出すための方策を共に考えることができればと思います。

◇過去と現在の留学生活環境や思い出などの文章から何かがを感じ取られたでしょうか。

◇この会報が年に数回発行することができ、コミュニケーションから理解へ、そして世界平和への橋渡しになればと、祈願致します。

（ S.S. 記 ）

林 錫 璋



ROTARY YONEYAMA SCHOLARSHIP ALUMNI ASSOCIATION

米山奨学生学友会（関西）

〒542 大阪市南区千日前2丁目5-2（歯科センタービル6階）

国際ロータリー第266地区ガバナー事務所内

電話 大阪(06) 32-0266